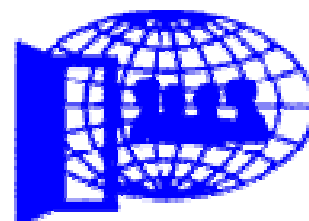




Servas Japan Tohoku

支部ニュース

No.77



◀ 目次 ▶

☆震災復興

- T. N 支部長..... 1-2
- T. Nさん..... 2-3

☆サーバス受入れ報告

- K. Yさん(秋田県秋田市)..... 3
- H. Hさん 3
- O. Mさん(宮城県仙台市)..... 5

☆サーバス体験記

- S. S (スコットランド人) 5-6
- ・連絡事項(事務局長 MS) 7
- ・編集後記..... 7

震災復興に赴いて

T. N

今年度の出来事を考える際に外れてはならないのが東日本大震災のことです。そして、そこから学ぶ事のようにこれからの政策にいかしていくかということでもあります。私は福島浪江町の避難者の受け入れをしてから、この震災とかかわるようになりました。

さて、この3月には、丁度おりしも、東日本大震災のトリプルの事故があり、我が家では福島浪江町などの避難者4家族12名の受け入れをいたしました。日本サーバスの東北支部のサイトに『疎開するお考えの方へ』のメッセージを出していたからのことでした。

その福島原発の4家族12名の方は、子どもの就学や仕事の関係で、ひとまず1ヶ月ほどの滞在でそれぞれ自宅のお近くの避難所や住居に退去されました。いわゆる2次避難です。でももう6箇所目だそうです。お別れ会を2回もやり春の小川やふるさとと一緒に歌ったのが昨日のように思い出されます。まだ私の中では震災は終わっていないのです。

毎日のニュースや原発事故、被災地の様子を見ていられなくなり、自分の仕事が一段落する6月中旬から何をしようかと考え、震災地のNPOの職員として、現地に赴任して手伝うようになりました。6月は陸前高田、大船渡、7月からは郡山、9月からは栗原市を拠点に南三陸、牡鹿半島、気仙沼、女川などです。

・以下、次頁・・・第18 福福丸進水式へ続く



南三陸町馬場中山での第18福福丸進水式

さる10月5日に私の所属するNPO法人 HOPEが寄贈した標記の第18福福丸が進水式を迎えました。

その進水式は、初めて見る私には感動的でした。よりによって、当日の朝ドックから出る途中で、ロープがはずれ、どこかをぶつけるというトラブルがあり、その修繕に時間をとられ、2時間遅れでようやく、中山の港に到着。みながクラッカーで歓迎して、船からは餅が撒かれました。東京からNHKが取材に来ていました。

進水式の式典では、組合長の後に挨拶をもとめられましたので、上杉鷹山の「なせば成る 為さねば成らぬ 何事も 成らぬは人の為さぬなりけり」を引用させてもらい、彼らの意思と団結力をたたえ、さらに地域の発展に結び付けられるようにと励ましました。

彼らも、ここにいたるまでに、震災で失ったものは多いと思いますが、またここまで得たもの、感じたものも多いはず。それをいつまでも忘れないで、門出として欲しいものです。

私の震災復興地に赴いてのまとめとして、次のことを提案しかつ診断士として活動したい。

*「徳になり、得になる」自分の何か1%を社会貢献に 企業でも、学校でも、社会でも、常に、人、組織、社会のリスクマネジメントに心を配る。 ヒューマンエラー、対人トラブル防止に力を入れる。 以上。

3.11 東日本大震災支援で見えてきたこと／防災マニュアル

T.N

3月の地震の次の日、自治会長が我が家の無事を確認しにきてくれました。

横浜の親戚からは安否の確認のために何回も電話をかけたが、つながらなかったために市役所にかけたのだそうです。

市役所の対応は、「市民個人の安否はわからない。大きな企業ならわかる。安否がわかっても個人情報なので教えられない」という対応に激怒していた。

結局自治会長が訪れたのはこの一回だけ。しかも会長から市役所に対して安否情報を報告していなかったばかりでなく、市からも問い合わせは無かったということが後でわかった。

市役所に設置したという災害対策本部の動きも市内外の情報は、山間地の住民に対して情報の伝達がなかった。このような災害の時に山間地の住民はお互いが情報を持ち寄ったり、食糧を分けあって生き残りをはからなければならない。

行政は全く当てにはならないという教訓を得た。

特に災害対策本部を設置しても、市街地だけの情報を見ているだけで、市民の安全や安心などを考えることもなく、安否の確認さえ行わないことに呆れた。

しかしこの状況が内陸部の小さな市だけでなく、県という大きな行政でも同じであったことに驚く。

各市町村には避難所が多くあった。なかでも多くの被災者を受け入れていたのが学校である。しかし避難所の運営についてのマニュアルがあるところは少ない。

4月7日の大きな余震の時などは3月の教訓から多くの人が小学校に詰めかけた。しかし施錠されていてガラスを壊して中に避難したと報告されている。これは行政の震災時対応の姿勢が1か月も持たなかったことと、この大震災の教訓さえ簡単に忘れられるほど人間は脆弱であることを示すものではないか。

行政は自分の目の前の状況しか見ない。目の前の状況に脳が飽和してしまい見ようとしなくなるのだらう。

避難所に行けば対応に追われ、自宅に取り残された独居高齢者や介護の必要な高齢者の安否の確認すらできない事態は、被災地でも生じた。

数多くの支援物資には食糧も多かった。しかし、支援物資を大きな集積所に集めたものだから、生鮮食品であっても取り出すのが困難になり、腐敗し結局はそのメーカーに引きとってもらった例が多かった。その量は数十トンに及ぶ。また、配布手段を探せずに多くの食糧が被災者に届かず、腐敗するよりは・・と職員に分配した例もある。

行政は驚くほど無能である。被災地から遠く離れた地域でさえ、市は普段からガソリンを契約保管もせず、市民の安否確認もできず、社会福祉協議会の職員ですら地域に派遣できずに1か月が過ぎた。

3月の早い時期に被災地3県の隣接県が直接の支援をすることで全国からの支援物資を集めた。宮城の支援担当は山形県で、多くの物資が集まった。しかし4月早々に宮城県自体が物資の充足を宣言したものだから、集積したほとんどがいくつかの地域の体育館や学校に残ってしまった。

山形県では5月の連休明けからその物資を内外のボランティアに解放した。紙オムツや消毒剤、簡易トイレや粉ミルクタオルや防寒着。その情報を頼りに、私はこれまで数十トンの物資を受領し被災地に運搬してきた。ところが、6月の半ば過ぎに、宮城県が突然山形県を訪れて物資を運搬し始めた。しかも新品の物資のみである。村山農業高校の寄宿舎にあった1800枚の毛布・蒲団は中古だからという理由で運搬しなかった。

これらは使用されなければ産業廃棄物として処分費用は山形県が出すことになるのだろう・・・と思いつつ、10月までに、約300枚の毛布・敷き毛布類を被災地に運んだ。それでもまだ冬を過ごすのには支給された夏の蒲団では十分とは思えない。

防災マニュアルの必要性とか見直しという話が持ち上がっていても、ほとんどが実際には役に立たない内容に落ち着く。それが行政の常。特に心のこもらないマニュアルばかりが出来上がる。3月の地震以来、他県から派遣される職員が被災地で活動していた。高知県では職員が帰ってくると、被災地の状況や派遣地域の職員の対応などの情報を集め、分析して防災マニュアルを検討していると聞く。とても賢いと思う。当該県である宮城で、地震後の救援や支援について検証が始まったという話は聞いてはいない。意識の違いはどこに起因するのだろうか。

地震から7か月が過ぎてもまだ瓦礫の撤去が進まない地域もある。仮設に入れないうちに避難所が閉鎖されたという話も聞く。寒くなってきてから寒さ対策をするから国に予算を出せというニュースが今頃出る。その様な対応を県知事自らがマスコミに流すから、良くやっている知事だと評価されているようだがそうだろうか。寒くなり始めてから「隙間対策だ」、「二重サッシだ」、「風除室の設置だ」というのはあまりに遅く、おそまつな話だ。冬の対策は夏にしなければならない。冬が来るのはわかりきっていたのだから。

防波堤を作ったから防災体制が出来たとは誰も思わない。被害が最小になるように努力し続けることが防災マニュアルに盛り込まれなければ意味がない。助かった命を支援できなければ、それはもはや人災としか言いようがない。多くの命が助かる方法と助かった命を大切にすることが盛り込まれてこそ防災マニュアルとなる。この点から言えば仮設住宅の耐寒対策は防災マニュアルには記載されていなかったことになる。

今日、カマキリの卵が2mの高さに見つかった。今年の雪は異常に多いというカマキリの予言が当たらないことを祈る。

サーバス受入報告

イケメン、ベンちゃん

K.Y

フランスよりメールが。日本語で書かれていた。英語の下手な私にとってこういうトラベラーは大歓迎
 すぐ 返事を出す。震災やら、原発など暗い話題が多いなか 東北の秋田まで来てくれる事は嬉しい限りです。
 秋田駅 PM 1:00 会うと18歳の超イケメン、少しオリエンタルな感じ、ベンジャミンに聞いてみたら全然なし
 とか。仕事が休みだったので男鹿半島へドライブ、時間がなかったのでスーパーで昼飯を買う。納豆嫌いの
 外国人がここにもいた。ヘルシーだから トライしてみろ —— うん わかった——と すなおに返事が返って
 きた。小さな私のラーメン店。夜ともなれば居酒屋風になり、4人いたお客は酒やビール飲み交わし ベンジ
 ヤミンも餃子を摘みながら どっぷり秋田の人に成りきってみんな
 と原発の事、震災の事を語り合っていた。ベンジャミンは何枚か写
 真を持ってきて—これはノパの恋人、
 こっちは母さんの恋人です—
 と。両親は離婚し、別居生活でも時々会っているようです。普段と
 変わりなく語りかけていた。

となりこいたお客が、冗談とも本気ともとれる口調で、—うらや
 ましいな——。ベンはこの日本語の意味が理解できず、何度もそ
 の女性に尋ねていた。

日本では一般的に考えられないが国民性か、文化の違いなの
 かな。

来年は留学生として日本に来るようです。再会出来ることを楽しみに
 しています。



H.H

8月26～28日に、フランスから来た、18歳の男子学生さんを、2
 泊受け入れましたので、報告いたします。

ベンジャミンさんは、5月頃、「夏に日本縦断旅行をしたい」と連
 絡をくださいました。南は九州、北は北海道まで、1カ月以上かけ
 ての、大旅行です。

「日本の地域統合」に関するレポートを作成する予定で、奨学金も
 もらったとのこと。将来は、外交官になりたいということで、数カ国語に堪能でした。数年前に、日本にお母様と
 いらしたことがあり、日本文化がとても好きで、日本語もよく勉強されていました。

我が家は、2歳のやんちゃ娘がおりますが、よく「ベンちゃん」となつていました。ちょうど、週末の夜に、
 キリスト教会の中高生会で、バーベキューが開かれたため、ベンジャミンさんも一緒に出かけました。同じ年頃
 の友人と、楽しく過ごすことができました。

印象的だったのは、福島第一原発事故の話をしていたとき、ベンジャミンさんは「フランスは、原発をなくさな
 いだろう。たぶん、日本もそうだと思う」とおっしゃったことです。私は、「なくさない、と決めつけないでほしいな。
 原発をなくそう、という思いを、私は強く持っているよ」と、伝えました。

短い間でしたが、とても温かい交流ができました。久しぶりのホストをして、サーバスつながりの出会いの素晴
 らしさを、改めて感じました。ベンちゃん、あ りがとう！

サーバス受入報告

E. J (M) and M. S (F) from U.S.A.

10月17日(月)～10月18日(火)

O. M

たった1泊だけの、しかも平日の滞在だったので、ほとんど何もする時間はなかった。彼らは午後4時過ぎ頃もよりの駅に着き、家に招き入れてから夕食の時間までおしゃべりをした。旦那さんのE.Jは建築家でももとはポルトガル系の南アフリカ出身、写真を撮るのが趣味だと言う。奥さんのM.Sは地質学者だ。私も仕事が忙しかったので、特別なおもてなしは何もなし。

いつもならスーパーの弁当が夕食のテーブルに並ぶところを、「せめて何か作るか」とカレーを作ったくらいだったが、それでも満足してくれた。夕食後は子供をお風呂に入れたり寝かしつけたりで、ほとんど彼らと交流はできなかった。いつもならゲストとの交流を私に任せて食器洗いや子供の面倒を見てくれる(という建前で実は英語で話さなければならぬ場面を避けているようだが…)主人も、今回は震災の影響で帰りが遅く、彼らともほとんど会っていない。



3週間の日本旅行で東京、京都、金沢、広島、仙台と回り、それからまた東京へ帰って行った。

建築家のE.Jは建物を見るのが好きということで、仙台ではメディアテイクを見たいといい、それから松島を訪れると言って、次の日の朝早く出発して行った。もう少しゆっくりして行ってもらえたら、もっといろいろ話もできたのだが、JRパスもその日で有効期限が切れる、ということだったので仕方がない。あまり、短い滞在だったので、ゲストブックに記入してもらおうも忘れてしまった…。ぜひ彼らに尋ねようと思っていた究極の質問、「何故この時期に日本へ来ようと思ったのか？」も訊

く暇もなかった。

陽気なE.J, うちの息子, 物静かなM.S

H23年夏のサーバス体験記 名取北高校

S. S

“Chiri mo tsumoreba yama to naru”

The short story of my trip around Japan with a few added flourishes for amusement's sake (not Nihonshu). I started my travels with a fellow ALT, "Dave". He is a lovely man.

Chapter 1: Tokyo and the hustle and bustle of the big city livin`.

“tonari no kyaku wa yoku kaki kyu kakuda”

We went to Tokyo together. The bus left early from Sendai, 6.30am. and we arrived in the capital in a mere five minutes. Only joking! The journey took a just –five- hours.

We made it to the hostel. It was not the “hotel California” but rather “Guesthouse Asakusa”. As the famous British Tv advert says: “It does exactly what it says on the tin”. Like a watering hole in the African Savannah this is the kind of place that attracts creatures from all over. There were Australians, Americans (from

Florida), more Americans, some Spanish people and of course plenty of natives, The plan involved questions and guessing : And the result...Let's sidetrack on the onsen. Of all the experiences I've had so far in Japan the onsen is perhaps the best- "why?!", I hear you cry. Put simply, it is an exquisite mosaic of sense impressions which leave the soul free to enter and go from the body at will. It calms the mind. the onsen was cheap. How cheap? Well, again, let me refer to an old British expression "as cheap as chips". About four to five hundred yen.

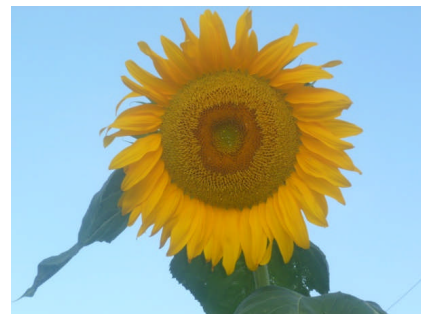
Chapter 2: Himawari and 5 star dining.

From Tokyo I took a bewitching array of trains going in different directions to arrive at my final destination Hinoharu station somewhere South of Tokyo. I was very tired when I finally met Mr. Y, a Servas member. . Both he and his wife were incredibly kind to me during the few days I spent with them. The first day was spent familiarizing myself with my new surroundings and breaking the proverbial ice as it's called in English teaching circles.

The second day the three boys went on an adventure.

At the falls area many Japanese families were sitting, chatting and watching the water fall away elegantly . We went to see the sunflowers too. Now for someone in Scotland that may seem a bit strange. However on top of that I was treated to luxurious fresh ice cream. This would rival the best Scotland has to offer: a beautiful little place on the high street in St. Andrews. Maybe even beat it...

The next day, the 14th of August, I made my farewells to Mr. and Mrs. Y.



Chapter 3: Nagoya and the I family

The I family consists of Mr. and Mrs. I and their daughter. I stayed with them for one and a half days and one night. What a beautiful family they are. I enjoyed my first afternoon with mother and daughter. It was a hot Saturday and people were sleeping on benches and staying cool in the big malls. We went first to get Mrs. I's hair cut from a small barbershop just around the corner from their flat. It sounds so mundane in writing but in practice I couldn't have felt more at home in their company. Mrs. I is an open-minded mother who tries to expose her daughter to various enriching experiences. Blowing bubbles and drawing on the sidewalk in chalk are two examples. It made me think that creativity is about letting go of what you think you know and accepting what the moment brings.

In the evening time, Mr. I returned from his work and we met him coming out of the nearest station exit. He came across as a relaxed and happy man. For dinner Mrs. I cooked a simple yet delicious mix of dishes. I remember eating a slightly bitter vegetable that was in season at the time. My brain initially reacted by saying it's not good; then it thought it's just different to what I'm used to; then I had some more and it thought it's actually quite good. Being in a new environment means experiencing things which you are not used to. Sometimes this can be exciting and sometimes a little scary. In my experience if I stay open-minded then I come away with good memories.

Again, I could write forever about the short time I spent in Nagoya but time is calling so let's move on to my last fixed destination: Nara. Thank you the I family.

Conclusion: To be continued...

God knows how many trains I took to get back to Funaoka station from Nara with seishun 18 ticket. I enjoyed my travels immensely during the August break and am grateful to everyone I met a long the way. I

look forward to next adventure. Maybe with less trains...

終わり

事務局から

事務局長 M.S

- * 2012年の国内会議に参加しませんか。
3月17-18日 京都でサーバス国内会議が開催されます。
日本サーバス創立50周年にあたり、台湾サーバス4名の参加 もあります。
例年の会議に加え、特別企画をいろいろ計画されています。
どなたでも参加出来ますのでぜひ予定に入れて置 いてください。
- * 震災後、東北支部の会員の皆さまには寄付金をいただきました。
その結果として、被災された会員の方に、被災された方の支援に活動された方に援助金としてお渡しすることができました。
その後、サーバス本部は「日本サーバス被災者支援プロジェクト」を立ちあげ今後起きるかもしれない災害に支援出来るように口座を作りました。
ご協力いただける方は期限をもうけていませんので よろしく願いいたします。

お手数料をかけますが、郵便局での振り込みになっています。

口座記号番号 00140-9-263481

加入者名 日本サーバス被災者支援プロジェクト

編集後記

各位におかれましては、復興支援のボランティア、ホームステイ受入れ等たいへんご苦労さまです。
支部ニュースの編集を初めて担当させていただきました。(Wordを初めて扱って戸惑うばかり)
紙面の都合を優先に／文章と写真が泣き別れしないよう／割愛させていただきましたことご容赦
願います。

H.M